「地上の星」とは、この友人の生き様にふわしい

同世代の友人の急逝の報に接した。
大学卒業後、約３５年前に地方都市で民家を借りて知的障害者の今でいうグループホームに取り組んだ人。
その実践の延長線上で知的障害者更生施設を作り、その後も在宅の知的障害者支援の機能を先駆的に拡大・拡充して種々の施設も作り、今では高齢者施設の運営も地域からお願いされ、運営されていた。

障害者の在宅支援の制度も補助もないあの時代に、よくぞグループホームという新しい試みに取り組んだものと、今となれば、彼女は凄い先駆者であったと思う。

私が勤めて間もない頃に「活動を見学させてください」とお願いしたら、「人に見て貰う程のことをしていないので…」という程の謙虚さをお持ちの彼女でもあった。
知的障害者施設を開設してからは、何度も訪問させていただいた。
施設では壊れない材質の食器を使う所が多い時代だったのに、陶器の食器を使っていたことに強い印象を受けたことを思い出す。
また、「障害のある方々を愛するとは、自分はどう表現、行動すればいいのか解らない。自分はこの方々に寄り添い切ることでしか愛を示せないのでないか」と語り、以後の私のあるべき姿勢に示唆をくれた人だった。

更に、高齢者の施設開設間もない頃に見学した折、「終の棲家で共に生活したご友人を見送られるように、また、一人寂しく逝くことのないように、この部屋を作った。」と、畳の部屋に案内・説明された折、感動しながら聞いたことを思い出す。

２０年前に私が自費出版したことを知ると、我がことのように喜んでくださり、色んなところに紹介してくだる、私には姉のような存在の人だった。

告別式は授業日と重なるので仮通夜の集いに参列したが、彼女を偲ぶにふさわしく、高齢者施設のあの場所に安置されていた。
本当に自分の最後の最後まで、ご利用者に付き添い切った「愛」ある彼女であり、「思想とは、行動なり」を、最後まで自らの生き様で具現化した「地上の星」そのものだったと思う。

福祉制度等が種々あるのが当然と思う今こそ、彼女のように当事者の視点からの「地上の星」の輝き（想い）を道しるべとして行きたい。

追伸： 1/31 の「河北春秋」に友人のことが載りましたので、２ P に、また、当記事を目に
して、いただいたメル友のコメントは「雑学 BN」の「メル友・コメント等関係（ Ⅱ ）」P、2006.02.09.「『地上の星』とは、この友人の生き様を云うにふさわしいへのコメント」に掲載していますので、ご覧下さい。

（2006 年 1 月 29 日　記）